阪神・淡路大震災

平成７年１月17日（火）午前５時46分　この時刻は，芦屋市及び被災市民には忘れることのできない時刻となりました。

兵庫県南部を襲った「阪神・淡路大震災」は，先人達が営々として築き上げた芦屋の美しい街並みを一瞬にして瓦礫の山と化し，多くの尊い命を奪い，市民を恐怖と悲しみのどん底に突き落としました。

ここに改めて犠牲となられました御霊に対し慎んで追悼の誠を捧げますとともに，ご遺族の方々と被害に遭われました皆様に心からお見舞い申し上げます。

このたびの大震災は，芦屋市の災害対応力を遥かに超える災害規模となり，私たちがかつて経験したことがない大変厳しい試練の日々をもたらし，多くの市民をはじめ全国各地の消防機関や自衛隊，警察，その他諸団体の方々の消火，救助活動と資機材提供に頼らざるを得ない結果となりました。

改めてご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げますとともに，物心両面からのご支援とご激励に対しましても厚くお礼申し上げます。

震度７という激震に見舞われたあの時から早５年が経過したところですが，今回の災害で得た貴重な経験，教訓，反省点を生かし，「災害に強いまちづくり」を進めるためにも，芦屋市消防本部・芦屋市消防団の災害活動・復旧，復興活動実態を記すことが被災都市の消防機関の責務であると考え，「芦屋消防50年誌」の編纂に当たり災害活動概要を認めたものです。

Ⅰ　芦屋市の概要

１　沿革

・明治38年阪神電鉄本線の開通及び大正２年国鉄東海道本線芦屋駅の設置によって，大阪・神戸の郊外として，その優れた立地と環境が着目され，「生産の地」から「生活の地」へと変貌し，別荘地と住宅化が始まった。

・大正９年の阪急電鉄の開通により，住宅地の山麓方面への広がりを促し，昭和４年には，株式会社六麓荘による土地区画整理事業が認可され，広壮邸宅地としての「六麓荘」開発が行われ，「高級住宅地・芦屋」のイメージを定着させた。

・昭和９年の室戸台風，昭和13年の阪神大水害，昭和20年の空襲による被害を受けながらも「芦屋国際文化住宅都市建設法」（昭和28年）の公布によって，国際性と文化性あふれる住宅都市の形成という目標のもとに，文化の香り高い住宅都市づくりが進められた。

・昭和30年代は，下水道事業，土地区画整理事業，国道43号の開通など，都市基盤の整備が進められた。

・昭和54年には，芦屋浜シーサイドタウンへの入居が始まり，また，「芦屋の顔づくり構想」として，ＪＲ芦屋駅北地区の市街地再開発事業に着手し，平成６年にほぼ完成され，南芦屋浜地区の埋立事業についても平成７年に竣工し，今後，都市施設等の整備を進める計画である。

２　地形・地質

本市の背山を構成している堅い岩盤は，古生層と花崗岩であり，第四世紀の地殻変動による上昇運動と大阪湾の沈降運動により，本市内で甲陽，芦屋，五助橋断層を形成し，起伏面（花崗岩）は風化が進んでいる。

山麓から海岸にかけては，大阪層群，段丘レキ層と呼ばれる洪積層及び沖積層であり，かつて，湖底や浅海底に堆積した土砂や河原であったレキ層などで，基盤岩を薄く覆って形成されている。

本市背後の山間部は，断層崖と河川浸食谷が海岸に向かって成長し，河川は，浸食作用によりＶ字谷を形成，市内を流れる芦屋川の堆積作用は，河口に扇状地三角州を形成し，海岸線を前進させている。

３　災害履歴

（１）地震災害

災害史上，兵庫県のどこかに震度５以上を受けたと推定される地震は，兵庫県地域防災計画書によれば，延べ31回と記録されているが，本市域における地震被害が明確に記録されたのは，今回の「阪神・淡路大震災」のみである。

なお，震災後の埋蔵文化財調査（市指定文化財小阪邸：三条町）により，1707年に発生した「宝永南海地震」時の液状化現象を示す噴砂跡が確認されている。